

卷頭言

Editor's Note

ある日、テレビで九州ローカル番組を見ていたら、佐賀の窯元で「銀河釉」という名前の特殊な釉薬の焼き物を紹介していました。武雄市にある玉峰窯 (<https://www.gingayu.com/>) の中尾哲彰氏のオリジナルとのこと。代表作は「銀河のオデッセイ」(写真1)。50cmほどもある大ぶりの皿で、紺地に銀色の「星」が散りばめられているようなデザインです。他にも「茶碗の中の宇宙」と称する作品など宇宙をモチーフとしたものが多数あり、狙って作ったものなのか、結果的に銀河や宇宙的なものになったのか、天文学者としては非常に気になる番組でした。

そこで、玉峰窯さんに3月中旬にメールで直接連絡を取ってみました。番組を見たこと、鹿児島大学の天の川銀河研究センターというところで宇宙の研究をしていること、機会があったら窯や作品を見学させていただきたい、旨伝えました。すぐに息子さんから返事があったのですが、なんと中尾哲彰さんが3月8日に病気のためにお亡くなりになったとのこと。先方は突然の（自称）天文学者からの連絡に驚いていたようですが、落ち着いてから訪問させていただく約束をしました。

武雄市の郊外にある玉峰窯を訪問できたのは8月9日でした。九州にいながらあまり馴染みのない佐賀県を訪れるよい機会と思い、プライベートな旅行として妻と車で向かいました。あいにく酷い豪雨のため九州道は一部通行止めになり、5時間もかかりましたが、暖かく迎えてくれたのは息子さんの真徳さんをはじめご一家の皆様。真徳さんとお姉さんのパートナーのステン・ヴァンダーレンさん（オランダ人）にお父様の銀河釉の作品や今お二人が作っている作品を見せていただきました。真徳さんは京都大学で哲学の勉強している大学院生でありながら、お父さんの跡を継いで焼き物も作っているとのこと。

せっかくなので、私もパソコンを持っていき、一般講演会で使った銀河関係の資料や理論シミュレーションの



写真1：中尾哲彰氏の代表作「銀河のオデッセイ」
(中尾真徳氏提供)

動画を見ていただきました。ステンさんは日本語をかなり話しますが、英語と日本語でかなり星の進化、元素合成から宇宙の構造までわりと専門的なことまで多くの質問が出て、時間が足りないくらいでした。

銀河釉は故中尾哲彰氏が独自に開発した釉です。ホームページの哲彰氏の挨拶には『数千年の古代オリエント以来、ひとは夜空の星が人間の運命や未来を予測すると考えてきました。そして今、十数年に及ぶ研究の中で、宇宙空間に拡がる無数の星達を思い起こさせる釉薬が生まれた時、私は「愛」と「自由」への想いを、未来につなぐ夢・希望を託して「銀河釉」と名付けました』とあります。



写真2：銀河釉拡大

銀河釉の特徴は、釉の中に浮かぶ不規則なキラキラした模様です（写真2）。実は哲彰氏はこれどうやって作るのか、その詳細を記録しておらず、真徳さんとステンさんが残された断片的なメモ

書きから試行錯誤してなんとか再現しようとしています。基本的には様々な金属を釉薬に混ぜ、それらが窯の中で溶けて温度が下がっていくときに、釉薬の表面で凝結していくことで結晶が形成される、ということのようです（専門的な工学の教科書も見せてくれました）。しかし、その温度管理が非常に難しく、扱うパラメータも多く、まだまだお父上の銀河釉を完全に再現するところまでは至っていないようです。しかし、若い二人はめげずに挑戦してようやく形になってきたとのこと（最近、NHKのドキュメンタリー番組にもなっていました）。まさに大学の研究室で実験をする学生のようです。私も銀河というからには spiral galaxy の渦巻き腕のような模様を作つてみてはどうか、とつい余計なことを言って、どうやればそれが実現できるか、という話で盛り上りました（本当にできたら素晴らしい）。

広い工房には昔使っていた窯や現在使っているガス釜（写真3）があり、膨大な数の様々な焼き物やこれから釜に入る「焼き物予備軍」がありました（写真4）。見るものすべてが物珍しく、気づけば結構長い時間お邪魔することになってしまいました。

同じ九州で「銀河」をキーワードに全く違う分野の、しかも意欲ある若い方たちと交流できたのは楽しい経験でした。

本号では5件の筆頭論文についての研究ハイライトが紹介されています（6ページ～を参照）。他にもこの半年さまざまな研究活動を行っていますので、本文を御覧ください。



写真3：窯の前にて、左からステンさん、和田、真徳さん



写真4：工房にはまだ完成していない陶芸品が数多くある

センター長 和田 桂一